

## まえがき

本書は『現代国際金融―構図と解明〔第3版〕』（2016年）を引き継ぐテキストである。今回、書名を改め、版の大きさも変更した。これらの改訂には多くの学生諸君、若いビジネスパーソンに手にしてもらいたいと願うとともに、国際金融の基本を深く掘り下げて学んでもらいたいという趣旨が含まれている。しかし、文章表現は第3版よりもわかりやすく、できるだけ理解しやすいようにと各執筆者にはお願いした。前書よりも平易になっているものと思っている。

それでも、第2章、第3章、第5章は少し難しいであろう。これらの章では、国際金融の基本を扱っているが、理論的あるいは金融上の慣れない用語が含まれている。第2章では、「持高」「為替スワップ」「為替調整取引」など、第3章では「ユーロカレンシー」「デリバティブ」「オプション」など、第5章では「マクロ・プルーデンス」「証券化」「レポ取引」など、である。読者の皆さんには、これらの章では「じっくり」腰を据えて取り組んでもらいたい。

さて、今回の改訂に際してわれわれが意識していた諸点は以下である。第1に、リーマンショックから10年を経過した国際金融、国際通貨体制の状況の変化、第2に、ギリシャ危機を契機とするユーロ不安が現在のユーロ体制、欧州経済に与えている諸影響、第3に、中国がグローバル・サプライチェーンに占める位置と、米中経済対立がドル体制に及ぼすインパクト、第4に、以上の世界経済、国際金融上の変化がある中での日本の経常収支黒字の減少と金融政策の限界、などである。

しかし、この5～6年ほどの以上のグローバルな諸変化をできるだけ反映させようとしているが、本書はテキストとしての性格上、詳細にそれらを論じつくすものではない。国際金融について深く学ぼうとする学生諸君、若いビジネスパーソンが国際金融の基本を踏まえて、現代の諸問題をより深く探求できる筋道を示すにとどまっているであろう。

また、紙幅の制限のために論述を切り詰める必要があったことから、十分に

論述できなかった章もあろう。さらに、1990年代、2010年代における諸問題、諸テーマに関しては、現在も影響が続いているにもかかわらず割愛せざるを得なかった。本テキストの前身である『現代国際金融—構図と解明』の初版、第2版、第3版を参照していただきたい。

今日、国際金融、国際通貨体制についての知識なくして、アメリカ経済、ヨーロッパ経済、中国経済はもちろん、日本経済の今後のあり様についても見通しをもつことは困難であろう。本書が大学でのテキストとしてだけではなく、若いビジネスパーソンなど広く国民に読まれることを願っている。

今回の改訂にはこの2年にわたる数回の研究会、打ち合わせ等が必要であった。田中綾一教授には事務局を担当してもらった。また、法律文化社の小西英央氏には改訂版の出版を快諾していただき、編集上の作業においてもお世話になった。両氏に謝意を表したい。

2019年12月

編 者